

小学校におけるタブレット端末を活用した 授業実践の SAMR モデルを用いた分析

三井 一希^{*,**}, 戸田 真志^{*}, 松葉 龍一^{*}, 鈴木 克明^{*}

An SAMR Model Analysis of Classes with Tablet Computers Use within Elementary Schools

Kazuki MITSUI^{*,**}, Masashi TODA^{*}, Ryuichi MATSUBA^{*}, Katsuaki SUZUKI^{*}

1. はじめに

教育の情報化の進展に伴い、初等中等教育における教育用コンピュータの整備が進められている。「学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」⁽¹⁾によると、2019年現在、教育用コンピュータのうち、約40%がタブレット端末を含めた可動式コンピュータとなっており、この割合の増加は今後も続いていくものと推察される。堀田⁽²⁾は、タブレット端末をはじめとする情報端末は、児童生徒が主体的・協働的に学ぶ際の学習環境として相応しいとし、初等中等教育での情報端末を活用した授業の重要性を説いている。また、2020年度より全面実施される新小学校学習指導要領では、「情報活用能力」が学習の基盤となる資質・能力に位置づけられた。こうした能力を育成していくためには、タブレット端末等の情報端末は欠かすことができない。

学校現場におけるタブレット端末の普及に伴い、タブレット端末を活用した授業実践の事例が多く報告されるようになってきた^{(3)~(5)}。山本・益子⁽⁶⁾は、教師が授業を設計する場合、実際に授業を参観したり、事例を参照したりするなどして授業へのイメージを持つことで効果的な授業を設計できるとしている。この点からも、教師がタブレット端末を活用した授業を設計する際には、実践事例を参照することが有効である

といえる。しかしながら、タブレット端末を活用した授業実践の報告が増加する一方で、それらの実践を分類したり、整理したりする取組は十分とは言い難い。

これまで行われてきた分類・整理の取組としては、文部科学省による「学びのイノベーション事業実証研究報告書」⁽⁷⁾が挙げられる。本報告書では、一斉学習、個別学習、協働学習という学習形態の観点からタブレット端末を含むICTを活用した学びの実践の分類が行われている。また、導入、展開、まとめという授業の流れに着目したタブレット端末を含むICTの活用の分類がなされている。しかしながら、この分類は、学習形態や授業の流れに着目した分類であり、授業内容についての分類ではない。タブレット端末を活用した実践がこれまでの実践と何が共通して何が異なるのか、タブレット端末特有の実践はどのような実践なのか、という点は明確には示されていない。これらの点を明確にすることで、これまで以上にタブレット端末を使う意義を教師が検討したり、授業に取り入れやすくなると思われる。

以上のような背景を踏まえ、本研究では、小学校におけるタブレット端末を活用した既存の授業実践を「SAMRモデル」を用いて分類・整理してその実態を調査することを試みる。また、現在の実態を把握したうえで、課題を明らかにし、タブレット端末の効果的な活用へ向けて、今後必要となる手立ての検討を行っ

* 熊本大学教授システム学研究センター (Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University)

** 常葉大学教育学部 (Faculty of Education, Tokoha University)

受付日: 2019年10月26日; 再受付日: 2020年4月4日; 採録日: 2020年6月11日